

**博士論文審査結果報告**  
**Report on Ph.D. / Doctoral Dissertation Defense**

政策研究大学院大学  
教授 垣内 恵美子

審査委員会を代表し、以下のとおり審査結果を報告します。

On behalf of the Degree Committee, I would like to report the result of the Ph. D. / Doctoral Dissertation Defense as follows.

学位申請者氏名 Ph.D. Candidate	Petrou Angeliki		
学籍番号 ID Number	DOC12102		
プログラム名 Program	公共政策プログラム Public Policy Program		
審査委員会 Degree Committee	主査 Main referee	垣内 恵美子 KAKIUCHI, Emiko	主指導教員 Main advisor
	審査委員 Referee	佐藤 禎一 SATO, Teiichi	副指導教員 Sub advisor
	審査委員 Referee	大山 達雄 OYAMA, Tatsuo	副指導教員 Sub advisor
	審査委員 Referee	園部 哲史 SONOBE, Tetsushi	博士課程委員会委員長 Chairperson of the Ph. D. Programs Committee
	審査委員 Referee	クサビエ・グレフ Greffé Xavier	外部審査員 Referee from outside institutions (パリ第一大学教授 / Professor of Department of Economics, University Paris I - Sorbonne)
論文タイトル Dissertation Title  (タイトル和訳)※ Title in Japanese	BALANCING PRESERVATION AND UTILIZATION IN GREEK MUSEUM POLICY: THE CASE OF EU REGIONAL POLICY INVESTMENTS IN STATE REGIONAL ARCHAEOLOGICAL MUSEUMS ギリシャミュージアム政策の利用と維持のバランス：地域考古学博物館における EU 地域政策助成の事例		
学位名 Degree Title	博士 (文化政策研究) Ph. D. in Cultural Policy		
論文提出日 Submission Date of the Draft Dissertation	平成 27 (2015) 年 7 月 31 日	論文審査会開催日 Date of the Degree Committee Meeting	平成 27 (2015) 年 8 月 28 日
論文発表会開催日 Date of the Defense	平成 27 (2015) 年 8 月 28 日	論文最終版提出日 Submission Date of the Final Dissertation	平成 28 (2016) 年 1 月 6 日
審査結果 Result	合格 Pass		

※タイトルが英文の場合、文部科学省に報告するため、和訳を付してください

If the title is in English, please translate in Japanese in order to report MEXT.

## 1. 論文要旨 Thesis overview and summary of the presentation.

世界有数の観光国の一つであるギリシャにおいて重要な誘客拠点である博物館に対し、EU は地域政策助成事業を通じ、これまで 20 年以上にわたり多額の支援を行ってきた。EU の文化投資の目的は、文化遺産を活用し、文化的な生活への市民参加を促すことで文化財やサービスへの需要と供給を増大させ、文化遺産を発展させることにある。特に、1994 年から始まった博物館投資の拡充は、博物館が観光市場、生活の質、都市の活性化、雇用の創造等に貢献することで、最終的にはギリシャの競争力を高める潜在的な可能性を有すると考えられたことによる。しかしながら、これら EU からの大規模助成は、博物館のハード面での充実にはつながったが、逆に入場者数は減少した。本論文では、主として制度論的アプローチをとり、インタビュー、アンケート結果、政府機関の報告書等、及び事例研究の分析に基づき、上記のギリシャ博物館を対象とする EU の大規模助成がなぜその目的を十分に達成できなかったのか、その理由を探ったものである。なお、事例研究については、設置地域、年間の来館者数、年間の来館収入、助成を受ける EU 地域プログラムの数、保有資産の重要性を配慮して、代表的な地域考古学博物館を抽出した。

本論文では、助成の受け手であるギリシャ政府内部での課題と、EU 政策のギリシャ博物館へのインパクトに分けて、現状分析及び課題抽出を行った。まず、欧州文明の源流であるギリシャにおいて、その文化的な中核をなす博物館は、民族アイデンティティの根幹機関であり、100 年以上にわたり遺産の保存を主目的として運営されてきたことから、現在の法制度、組織、予算配分等博物館政策のシステム全般にわたり、文化遺産を活用するという概念が欠落したものになっていることを、公的資料、インタビューに基づき明らかにした。特に、遺産保存の専門家が組織の意思決定を左右する集団を形成し、保存面に重点化した政策決定を行う一方で、地域性やコミュニティとの連携といった博物館活用に必要不可欠な要素は考慮されず、そのための専門家も育成されてこなかった。このため、EU の大規模助成のかなりの部分が主として遺産保存に関連する施設整備のために使われ、アウトリーチやワークショップなどの人材養成、職員配置、情報提供といったソフト面での投資はほとんどなされず、このことが不満足な観客サービス、ひいては入場者数の減少につながっていることが示された。

次に、EU の主要な投資政策である地域政策は、EU 条約が各国の文化政策に介入することを制限することから、加盟国に対して助成やインセンティブを与えることを目的に行われる。ギリシャの博物館は、第 2 期 CSF (1994 年～1999 年：観光事業の一部としての文化資産発展のための助成)、第 3 期 CSF (2000 年～2006 年：経済的発展のための博物館への大規模助成)、NSRF (2007 年～2013 年：地域魅力醸成促進事業の一環としての博物館助成) の対象となった。この助成は、2000 年から 2013 年にかけてだけでも 20 億ユーロに上り、ギリシャ政府の年間文化予算全体の 6 倍に相当するものであったが、結果として急激な国立博物館数の増加をもたらした。近年のギリシャ政府自体の財政困難とあいまって、最低限の運営費の配分や人員配置すらなされず、借入金の増加、運営時間の短縮、閉館等を余儀なくされる事態も生じた。また、ギリシャにおける EU 投

資が、誘客のための施設設備(駐車場やカフェ等)の整備を条件づけていることから、その必要性の有無に関わらず、博物館の(遺産保存以外についても)ハード面におけるインフラ整備は進むが、一方で、資産の積極的活用にあ資するようなプロモーション等を条件づけていないことからソフト面での整備に対するインセンティブが働かないことなどを指摘した。本論文は、こういった実態を初めて現地調査によって明らかにするとともに、ギリシャ政府の内部構造だけでなく、EUの投資政策の実際の運用面からも、ハード面のインフラ整備に偏ることを指摘した。

本論文は、経済的価値に重きを置くEUの地域政策に対して、ギリシャの博物館政策および遺産政策が歴史的・遺産的・存在的価値を重要視するという政策目的の祖語、そこから派生する制度設計の祖語により、ギリシャがEU地域政策の目的を達成できない状況にあることを実態に基づいて明らかにし、ギリシャ政府、EU、博物館関係者に対して、共通の利益を持つステイクホルダー(地方政府や市民組織等)と協働する新しい博物館政策への転換の必要性を示した。特にギリシャとEUのパートナーシップを活用していくことに着目し、遺産の保存と活用の双方に向けて均衡ある運用を促す視点は重要であり、博物館の社会的位置付が、コレクション重視からソーシャル・キャピタルへと大きく変換しつつある今日、博物館の在り方を考える上でも貴重な示唆を与える研究成果と言える。

なお、学会発表としては、”Local government and central government perspectives for regional museums and local development in Greece under the 3d EU Community Support Framework 2000–2006”(22nd ENCATC Annual Conference、査読有)があり、現在ミュージオロジー専門の国際学会誌への投論文を作成中である。

## 2. 審査報告 Notes from the Degree Committee (including changes required to the thesis by the referees)

本論文の最終報告に引き続き、平成27年8月28日(金)10時より審査委員会が開催された。審査委員は垣内恵美子教授(主査)、大山達雄特別教授(副査)、佐藤禎一教授(副査)、クサビエ・グレフ教授(パリ大学)、そして園部哲史博士課程委員会委員長の5名であった。(なお、主査は当日欠席、後日コメント意見を提出した。)本論文は、平均で合格点に達していたが、先行研究の追記とあわせて本論文の位置づけを明確にするとともに、結論部分をより掘り下げる必要があるという意見があり、以下の点を修正、各審査委員に再提出、各委員で修正箇所を確認した上、最終論文を提出するべきであるということで合意した。本論文に関する修正要請及び主要なコメントは以下の通り。

1. 序論部分について、本論文の位置づけとともに、先行研究を充実すべき。
2. よりポジティブに書くことはできないか。また、EU政策からの脱却について触れることはできないだろうか。

3. 結論部分についてより丁寧で掘り下げた議論が必要である。博物館の地域性やコミュニティとの関係、規模や性格によって適切な施策が異なることも想定される。この点も含め、結論を拡充すべき。

### **3. 最終提出論文確認結果 Confirmation by the Main Referee that changes have been done to the satisfaction of the referees**

最終提出論文を各審査委員に修正メモと共に送付し、確認した。

### **4. 最終審査結果 Final recommendation**

審査報告にあるコメントに対して、著者は直ちに論文の修正を行い、修正稿を提出し、主査の最終確認を経た上で各審査委員の了解を得た後に博士論文最終版として提出した。審査委員全員は本論文が本学博士論文として妥当であると結論づけた。